

試し読み版

二次元3D文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

特捜姫兵

ARTEMIS
アテナ
異伝

斐芝嘉和
表紙 / 桐島サトシ

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『特捜姫兵アルテミス外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『特捜姫兵アルテミス 白濁の戦女神』『特捜姫兵アルテミス2 黒翼のマリア』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



特捜姫兵

ARTEMIS

アステリス

外伝

斐芝嘉和
表紙 / 桐島サトシ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ゆうき あきら

結城 晶

紅いE Xスーツを纏う黒髪的女子大生。正義感が強く、ストイックな性格と高い戦闘能力を買われてアルテミスにスカウトされる。

デージー・フラット

まだ子どもながら高い知能を誇る、アルテミスのメンバー。つねに冷静で、あまり感情を表に出さない。主に戦闘の後方支援を担当。

「ん……ここ、ここは？」

心地よい微睡みからゆっくりと目覚めた晶は、薄暗い天井を見上げて訝しそうに目を細めた。全身が重い。身体が芯まで冷えている。背に感じる冷たい硬さは、コンクリートだろうか——わずかに身じろぎすると、破れたEXスーツが引きつれて糸のように細く縋れた残骸が軋み、乳房や太股の柔肉をキュツキュツとしごかれた。

「……あ」

脳裏に閃く園児の顔。

尻房や唇に思い出す小さな手指——いや、ペニスの感触。

「ああっ!!」

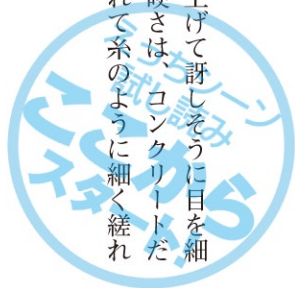
頬を紅く染めて跳ね起きた晶は、胸元で揺れる乳白色の双球を抱き締め、薄闇に輝く太股を摺り合わせて、記憶に震える。

（わ、私……なんてことを……あの子たちに、あんな、あんな……）

いくら催淫香に酔っていたとはいえ、守らなければならぬはずの子たちを誘い、その小さな性器を引き寄せて口に咥え、あんな、あんな——。

震える唇に、青い肉棒の感触が蘇る。

尖端まで薄皮に包まれたソレは晶の痴態に応えて健気に強張り、ピクン、ピクン、と震えていた。口に含み、包皮の中に舌を挿し込んで恥ずかしがり屋の亀頭をさせると、少年



は玩具のように小さな手で晶の黒髪をギュッと掴み、耳の先まで真っ赤に染めて、なにかを耐えるようにプルプル震え——。

「うううっ！」

口の中に迸ったのは、精液と呼ぶには薄すぎる粘液だった。射精した■は腰を抜かしたように座り込み、うっとりとした目で晶を見つめていた。

気持ちよさそうな顔だが、ダメだ。

あんなに■い少年に、あんな淫らなことをしてはならない。

だが、晶の記憶にはまだ先があつた。

——ちゃんと出るのね、うふふ。

——もっと気持ちいいコト、教えてあげる。

放心した少年に擦り寄り、覆い被さつて——。

柔らかくなつてしまった幼いペニスを細指に挟み、クニクニと揉んで——。

——ココ、ココよ。分かる？

——ンッ！ ふ、ふふ……ね、温かいでしょう？ ヌルヌルしてるでしょう？

「イヤ、ダメ、そんな……」

——さあ、動いてみて。お姉さんの奥へ、オチンチンを……そう、そうよ。もっと腰を入れて。もっと強く、して……そう、そう、そうっ！ その、調子、よお！

「あああああああつ！」

ガンツ！

握り締めた拳で床を叩き、痛みで記憶を追い払った。

が、恥辱の痕跡は身体中に残っている。

熔けたように大きな穴を開けて白く艶めかしい柔肌をはみ出させているEXスーツ。

頬や額、黒髪や乳谷に貼りつき、パリパリに乾ききった生臭い白濁液。

尻穴がジンジンするのは、緑の触手をねじ込まれたため。

破れた皮膚からムニユツとはみ出した秘裂には左右から群がってきた園児たちの小さな手指の感触がいまだにはつきりと残っていて、クリトリスや粘膜花卉には快感の余韻が拭いがたく染みついていた——と。

「ようやくお目覚めか」

「……ッ!？」

男の声にハッと顔を上げると、数メートル先に白衣を纏った瘦身の男が立っていた。

チームリーダー・白藤^{しろふじ}マリアの父にしてアルテミスの、いや全人類の、敵。

おぞましいUMAを作りだしオーバーズを操って世界を脅かしている狂気の科学者——。

「プロフェッサー、S！」

込み上げてきた怒りが、手足の先まで充満していた淫熱を吹き飛ばした。EXスーツは

穴だらけで生身の腕力しか出せないが、目の前に立った男は貧弱そうだ。

「アナタさえいなければ……私は、あんなコト……」

低い声で唸りつつ、晶はゆらりと立ち上がった。

眉は逆立っているが、バイザーの下の黒い瞳は冷ややかに間合いを測る。

（一步……いや、素手だから二歩半。下にフェイントの蹴りを飛ばして……あ!?)

整いかけていた呼吸が、フツと止まった。

白衣の陰から、頬を赤らめた銀髪の少女が現れたからだ。

肩の辺りで切りそろえられたフワフワとした銀色の髪、ふっくらとして柔らかそうなあどけない頬、白いスーツに包まれた細く小柄な身体——小さく形よい鼻、ルビーのように紅い瞳、桜の花びらを想わせる瑞々しい唇——。

「デージーッ!! 無事だったの!」

「ふぁ? あ……晶、さん……」

名前を呼ばれた少女はポツと赤らんだ頬を上げ、掠れた声で言った。

様子がおかしい。

いつも冷静な瞳は熱っぽく潤み、目の前にいる晶の姿を探すようにユラユラしている。妖精のように華奢な身体はやや前のめりで、白いブーツを履いた脚は膝を内側に向け、いまにも倒れそうに覚束ない足取り。

幼い胸を窄め、細い両腕を股間に伸ばし——。

「な……なに、ソレっ!! や、やめなさい、デイジーッ!」

硝子細工のように華奢な両手は、赤々と輝く肉棒をしごいていた。

亀の頭に似た肉瘤、猛々しく張り出したエラ、両手を連ねてもなお余る長くて太い肉色の茎——見間違いいではない。立派すぎるほどの男根だ。

「なにしているの、ダメよデイジーッ!」

慌てて駆け寄った晶は、兵馬ひょうまを突き飛ばし、頬を赤らめて喘いでいる小柄な少女を抱き締めた。小さな手を包み込むようにして握り、捻りながら引き剥がして、おぞましい物体の根本を確認する。

(ま、まさか……そんなッ!!)

雄々しく勃起したペニスは、デイジーの幼気な割れ目の上端から生えていた。背側の薄皮は白く輝く三角地帯から立ち上がり、裏筋側はマシユマロのような柔肉の中に消えている。つけ根に喰い込んでいる肉のリングは、クリトリスの莢か——だとすればこの、紅くヌメヌメ輝いているおぞましい肉棒は……あり得ないほど膨れあがった淫核本体。

性感神経の塊のような肉豆が、そのままの感度でここまで大きくなってしまったら——想像した途端、晶の秘裂がジュワツと潤んだ。

(くっ!! なに考えてるの、私ったらっ! こんなときに、そんな……)

慌てて頭を振り、淫らな好奇心を振り払ったのに、冷たい空気に撫でられている肉畝に湧き上がった恥ずかしい疼きは消えてくれない。

猛々しく反り返った淫棒の根本、太い肉茎に押し拗げられて逆三角形に開いたデイジーの秘裂は、まだ蕾のような肉薔薇に甘酸っぱい蜜を滲ませ、あられもなく咲きこぼれた粘膜花卉がヒクンヒクンと喘いでいた。弛んだ花芯から立ち上る芳香は、頭がクラクラするほど濃密な催淫香。

己の匂いを嗅いでも欲情するのか、白いスーツの破れ目から絞り出された幼い乳房は桜色に上気して、その尖端では鮮やかに紅い乳首が芽吹く間際の木の芽のようにぷつくりと膨れあがっている。

（いけない、オーバーズになりかかってるんだわ……）
唇を嚙んでも、どうしようもない。

UMAとの融合が初期段階であれば外科的な切除手術も可能だが、フロントチームメンバーの品には知識も技術もない。外性器が変質し始めていても間に合うだろうか、それとももう、手遅れなのか——その判断すらつかない。

焦る品の腕に縋り、赤々と輝く淫棒を突き上げるようにして、デイジーが呻いた。

「あ、晶、さん……私、ダメ……クリトリスに、血流が……充血して肥大化、もう、限界、です……爆発、し、そう……く、ンう、うううう……ッ！」

「しつかりして、デージーッ！ とにかく触ってはダメ、余計に辛くなるわよ！」

言い聞かせる晶の声も、肉欲に苛まれていた幼気な少女の耳には届いていないようだ。晶の腕の中でしきりに身体を振り、掴まれた腕を懸命に捻って、肥大化クリトリスに手を伸ばそうともがく。

（ああん、もうっ！ こんなときはどうしたらいいの、マリア!?）

UMAとオーバーズに關しての知識を多く持っているリーダーの顔を思い浮かべたが、ココにはいない。

それどころか、デージーをこんな目に遭わせた白衣の男も、いつの間にか姿を消していた。「チィィ……ッ！」

仲間の危機に際してなにもできず、千載一遇の機会も失ってしまった。

晶にできることは、ただひとつ――。

「ごめんね、デージー！」

「はうっ!？」

幼気な少女の鳩尾に当て身を喰らわし、取り敢えず失神させた。腕にぐったりと寄りかかってきたデージーはあまりにも小さく、軽い。

「本当に、ごめん……私にはこんなことしかできないのよ……」

白い少女を冷たいコンクリートの床に横たえ、晶は小さく呟いた――。

* * *

ガランとした空間は、地下駐車場か倉庫か。数メートル間隔で立ち並ぶ太い柱が、高い天井を支えている。サツカー用のグラウンドが二面は取れそうなくらい広いのに、柱の上方で輝いている電灯はあまりにも小さい。立ち込める薄闇は黴臭く、淀んだ空気はひんやりとして湿っぽい。

「扉はココだけ……か」

ゴオン——軽く叩いた音が、薄暗い広間に響いた。

晶の目の前に聳えているのは、高さ五メートルほどもある大きな鉄の扉。左右にスライドして開くようで、片側を開ければ荷物を積んだフォークリフトが、両側を開ければコンテナを載せたトラックが、そのまま出入りできそうだ。

失神したデイジーの細い手首をスーツの残骸で縛り上げた晶は、ひんやりとした壁を辿って広間をぐるっと巡ってみた。出入りできそうな場所はココしかない。EXスーツにエネルギーがあれば、鉄扉でもコンクリート壁でも破れるのだが——。

じゅわり。

「ン……ッ!？」

秘裂が熱くなり、恥ずかしい蜜が滲んだ。性的な想像をしたわけでもないのに、なぜこんな——考えるまでもない。晶の体内でもオーバース化が進行しているのだ。

保母に化けていたオーバーズに犯され、尻にも膣にも口にも生臭い白濁液を大量に注ぎ込まれてしまったのだから、当然だろう。

（時間がない……理性まで侵蝕されてしまう前に、デイジーを連れてマリアと合流しなければ……）

肉奥に刻み込まれた恥辱を押し殺し、晶は広間の奥を振り返った。

湿っぽい薄闇の向こうには、おぞましい淫棒を生やしたデイジーがいる。注ぎ込まれた量が違っていたのか、それとも身体の大きさが関係するのか、天使のようにあどけない彼女のほうが進行が早い。

（デイジーが手遅れになる前に、早くココを出なければ……でも、どうやって？）
答を見つけられぬまま、俯き加減にもといた場所へ戻っていくと――。

「ン……ふ……ンう……」

氣を失っていたはずの少女が起き上がり、太い柱に背を預けて、真っ赤に膨れた肥大化淫核をシュッシュ、シュッシュとしごいていた。無表情がトレードマークだった幼い頬に恍惚の笑みを浮かべ、わずかに開いた唇から上擦った吐息を漏らし――。

「な、なにしてるの、デイジーッ!? ダメッ! やめなさいッ!!」

慌てた晶は少女に飛びかかり、華奢な細腕を捻り上げようとした。

が、学習能力の高いデイジーに同じ手は二度も通じない。

掴んだつもりの手が握り返され、甲側に捻られて関節を極められてしまった。

「あ……ッ!？」

反射的に振り解こうとした瞬間、座り込んでいたデイジーがバネ仕掛けのように立ち上がり——ポヨンッ!

晶の豊満な乳房の狭間に小さな頭を押しつけ、ほどよく引き締まったウエストに細い腕でしがみついていた。

(くうっ!? い、いけない……ッ!)

背に絡みついた腕の細さ、乳谷に感じる少女の吐息、スーッの残骸に緊縛された太股にグリッと擦りつけられる熱い巨根——なによりその小柄さに、胸がざわめく。

子ども好きだという自覚はずっと昔からあった。

だがそれはこんな、性的欲望と結びついた感情ではなかったはずだ。

熱い肉棒の接近を感じ取り、剥き出しの肉畝がじわんじわんと火照り始めた。月明かりを集めたような銀色の細くしなやかな髪が乳肌を気持ちよく、頬擦りされた乳谷に淡い悦びが湧き上がる。

「だ、ダメよデイジー、離れ、て……」

抗う手足に力が入らない。

ほっそりとした腕で懸命にしがみついてくる少女がどうしようもなく愛おしく、軽やか

な銀髪に細指を絡め、しなやかな背をギュッと抱き締めてやりたくなる。

「限界です、晶、さん……クリトリスが、熱くて、痛くて……く、う、ううッ！」

晶の胸に顔を埋めたデイジーは、上擦る吐息をこぼしつつ力一杯しがみつき、小さな尻をカクン、カクン、と振った。晶の太股に触れた淫棒が生温かな粘液に濡れた側面を擦りつけ、ルビーのように紅く輝く亀頭で晶の尻房を叩く。

（か……硬いッ!? こ、こんなに……ああ、熱いつ!）

肉畝を掠めて前後する淫棒は、紅い熾火を内に秘めた焼け木杭のようだった。

その硬さにデイジーの苦しみを、その熱に欲望の強さを感じる。

「触れないと、ウズウズして……触れると、ますます硬くなって……」

紅い瞳を潤ませたデイジーは晶の柔らかな乳房に頬擦りしつつ、掠れた声で訴えた。

「どうすればいいのか、分からないのです……ただ、ジツとしていられなくて……こ、腰が、勝手に、動いてしまう、の、ですう……ッ！」

「ま、待ってデイジー……きヤンッ!?」

昂った少女に圧され、尻餅を搦いてしまう晶。

痛む尻をさするヒマもなく、しきりに腰を振るデイジーがのしかかってきた。弾けんばかりに張り詰めた肥大化クリトリスに太股のつけ根が撃ちまくられ、感じやすい肉畝が真つ赤な亀頭に叩かれる。

「ダメよ、ダメ、やめ……ンうっ!」

チュ! プチュッ!

ただ擦りつけられていただけだった小さな顔が乳谷の中で向きを変え、柔らかな唇が吸いついてきた。背に回されていた細腕が脇腹を撫でて胸へと迫り、双球の側面に貼りついて力任せの愛撫を始める。

(デイジー……アナタ、そんなに……)

いつも憎らしいほど冷静だった少女が、我を忘れて獣のように――。

私の乳房にこんなに強くむしゃぶりつき、ギチギチに強張った淫棒を擦りつけて狂ったように腰を振り――。

可哀想、と想う。

癒やしてやりたい、と想う。

ほかでもないデイジーなのだ、天使のように可愛い少女なのだ。

こんなに無垢で純粹な少女が私の身体で満足してくれるなら、それに勝る悦びは――。

「……っ!? だ、ダメッ! ダメだっばっ!」

倒錯した性愛を受け入れそうになっっている自分に気づき、晶はハッと我に返った。覆い被さった少女の温かさや夢中で腰を振る健気さは愛おしいが、だからといって身体を許してよいわけがない。

しかし、もう遅い。

コツを挿んだデイジーが腰の動きを変え、鋼のように強張った淫棒で柔肉の畝に切っ先をねじ込んできた。蜜に潤んだピラピラが滾る亀頭に掻き分けられる。紅くむくれた尖端が、喘ぐ花芯にグイグイ迫る。

「ま、待ってデイジー、ダメ、い……やあ……ッ！」

肉瘤に磨り潰された粘膜花弁に微弱電流が湧き上がり、抗う声が波打った。羞じらつているつもりもりの脚が開き、熱い剛直を押しつけられた膣穴がユルユルと解けて――。

グチュポッ！

「ふあう……ッ!？」

張り出したエラに壺口を弾かれ、クリトリスの裏側の感じやすい場所――味蕾のようにざらついた粘膜が分布するGスポットが硬く張り詰めた亀頭にしごかれた。淡かった悦びが一気に膨れあがり、ヘソの裏側まで甘く痺れる。

（ああ、ああ……ッ!？ こんなに、熱い……こんなに、かた、いいっ!？）

恥丘の裏側をグイグイ押し拡げる淫棒に、デイジーの昂奮を感じた。壺口の裏側で弾けんばかりに張り詰めた肉クサビは燃えるように熱く、流れ込む血潮に内側から突き上げられてドクン、ドクン、と脈打っている。

「くう、ン、うう……」

晶の胸に顔を埋めたデイジーが、仔犬のような声で鳴いた。紅い瞳は涙に潤み、焦点を失ってユラユラ揺れている。乳肌を押しつけられた唇はぼつとりとして柔らかく、吐息混じりの涎が晶の胸を濡らす。

「デイ、ジー……」

呼びかけても、返事はない。

まだほんの少ししかねじ込んでいないのに、もう果てそうになっているのか――。

ドキン！ ドキン！ ドキン！

少女に頬擦りされた胸の奥で心臓が跳ね躍り、口の中が乾く。

無表情だったデイジーにこんな顔をさせているのは、私の臆だ――そう思うと、無碍に突き放せなくなる。

「いい、わ……して、デイジー」

胸にしがみついた少女の髪を優しく撫でて、晶は静かに話しかけた。

（一度だけ、一度だけよ……だってデイジーが、こんなに……こんなに気持ちよさそうな顔を、してるのだもの……）

機械のように醒めていた少女がようやく手に入れた、人間らしい表情。

これを消してはいけない、大切に育ててやらなければ――その一心で身体を弛め、小さな背中に手を回す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>